

【FD・SD ニュースレター】

2021 No.2

2021年
12月発行

FD・SD News Letter

教育研究推進センター長 ご挨拶

皆様方におかれましては、日頃より教育研究推進センターの活動にご理解・ご協力いただき、誠にありがとうございます。前年度より「FD・SD ニュースレター」を発行するようになりました。

ご存じとは存じますが、FD(Faculty Development)は、学修者を中心とした大学改革を目指して、授業方法やカリキュラム内容を改善・向上させるための組織的取り組みを意味します。一方、SD(Staff Development)は、職員(単に職員だけでなく、教員や大学執行部など大学運営業務全般に広がっている)が、大学等の運営に必要な知識・技能を身に付け、能力・資質を向上させるための研修等を意味します。

FDは、2008年に大学設置基準上で「FDの義務」が制度化されて以降は、各大学で広く取り込まれるようになり、現在ではさらに発展してきていると思われま

す。SDは、2016年に大学設置基準等の改正があり、2017年4月から「SDの義務化」がなされました。

これらFDとSDの活動は、さらに質的にも量的にも促進が要求されると予測されます。FD・SDに関する大学の喫緊の課題として、具体的には、改正著作



教育研究推進センター長 石原 俊一

権法への対応、教職課程認定基準改正、ハラスメント防止、教育DX、成績評価基準の適切な運用、学修成果の可視化などがあげられます。

大学改革のため、今後とも当センターとして、様々なFDとSDの活動を促進して参りたいと考えております。

皆様方におかれましては、教育研究推進センターの活動にご協力いただくことが多々あるかと存じますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

授業改善のためのアンケートの活用

教育学部

2020年度秋学期授業改善のためのアンケート結果を利用したFD活動

① 2020年度教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

今回のFDでは、主に「2020年度秋学期授業改善のためのアンケート結果の分析について」を用い、

結果の理解と意見交換を行い、以下のことを確認した。

受講の継続状態は、85%が放棄無し、放棄科目が1～3科目が10%程度と良好であり、多くの学生が

授業に参加できていたことが伺える反面、10科目以上や7～9科目を受講放棄した学生も少数ながら存在し、その学生に対する今後の丁寧な対応が求められる。

オンライン授業への満足度に関しては、春学期に比べてやや不満・不満が減少し、授業担当者の工夫と努力が伺えたが、改善が必要な点として「担当教員のオンライン授業のスキル」「フィードバック」「教員からの情報提供」等の数値が高く、オンライン授業運営への課題が春学期から引き続き多かった。

授業外学修時間については、単純な比較は出来ないが2019年度秋学期より増加傾向が見られる。課題の難易度・分量により、授業外学修に要する時間にばらつきがあることも窺えるが、オンライン授業により毎時間のレポート提出などが増えた結果と推測される。

授業取り組みへの意欲は、2020年度春学期に低下したが秋学期には「大いに取り組んだ」「やや取り組んだ」を合わせ8割以上で学修に対して意欲を持っていることが確認できる。一方で回答者277人中20名が「あまり取り組まなかった」と回答しており、引き続き授業構成の工夫などが授業担当者に求められる。

授業内容の理解を深めるために主体的に行ったこととして「パソコンやスマートフォン等のICTを利用」の割合が群を抜いて高かった。「予習・復習」や「関連書籍や論文を読む」も2019年度秋学期に比して高い割合になっており、オンライン授業での課題提出などにより授業外の学修に変化が起きたことが原因と思われる。

履修によって何が得られたか、という問いには2019年度秋学期に比べ、すべての質問項目に対して「大いに得られた」の数値が激減しており、「やや得られた」が増加している。この結果により授業で意図されている成果にやや不安があると推測されるため、今後不十分な所を見極め、補う努力が必要である。

② 次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

今回のアンケートにおいて、特徴的であった授業外での主体的な学修に「パソコンやスマートフォン等のICTを利用」の著しい増加に関連して、「レポート課題などで、安易なコピー&ペーストが多く見られるようになっている」と懸念する意見が出された。今後の課題として、いかに学生への研究倫理教育を徹底していけるかが挙げられ、学部教員全員が同じ認識を持ち組織的に学生に対して指導を行う必要があることが共有された。この事に対して学部長より、他の学部とも共通認識を持ち、協力して解決方法を見出していきたいという方向性が示された。

また、授業受講が継続できなかったことに「授業のオンライン化が影響した」との回答が8割を超えており、オンラインのどのような要素が影響したのかを解明し、今後のオンライン授業の方法の改善や学生への対応に活用していくことも課題である。改善要望の多かった、オンライン授業における教員のスキル向上については、学部として現行のオンライン授業担当者を中心に情報共有を継続していくことが確認された。

人間科学部

2020年度秋学期授業改善のためのアンケート結果を利用したFD活動

① 2020年度教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

司会進行は高尾教育・研究推進委員が担当した。

事前にアンケート結果を見てFD活動に臨むことになっていたが、10分弱を使い高尾委員が結果の特徴点を紹介した。

その後、以下について意見交換を行った。

- (1) Q5、Q7の結果から学生の授業途中放棄が約2割であること、シラバスをあまり参考にしていない学生が約2割であることについて
- (2) Q9の結果から、学生の授業外の学修時間が30分から1時間半程度が多く、長いとはいえないことについて
- (3) Q15の結果から、「学生からのコメントや、教員

からのフィードバックなど」「大学及び担当教員からの情報提供」「担当教員のオンライン授業スキル」の平均値が低く学生が、改善が必要だと感じていることについて

② 次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

上記について以下のような意見や考えが教員から出された。

(1) について

ア. 授業途中放棄約2割について

- 3、4年次生で卒業要件単位取得を確保するために「履修緩和」を申請しかなり多めに履修登録をし、途中で放棄してしまうケースが多いのではないか、(2021年度秋学期での改善は難しいが)来年度は「履修緩和措置」を修正するため、上記に伴う授業途中放棄は減少するものと考えられる。
- シラバスをしっかりと読むことのない学生の履修登録がいい加減になっている可能性もあるだろう。授業途中放棄とシラバス参考の程度のクロス集計結果を知ることができれば、さらに検討ができるのではないか。
- オンデマンド等の授業の初回授業でどのように授業の内容や方法について説明したかも関係していると考えられるので(秋学期は)それを意識する必要がある。

イ. シラバスを参考にしていない学生約2割について

- 昨年度はそれ以前に比較し、シラバスを参考にしていない学生の比率は高まっているようである。これは通常の年度であれば、部活等の先輩からの情報が履修科目を判断する際に役立っていたのではないか。

これとは別にBibbsのシラバス参照の記載を見やすくすることや、以前のように各授業のシラバスを記載した冊子を配布することが効果的ではないか。

- 公認心理師などの資格にかかわる授業科目で

は、記載すべき事項が定められているため、シラバスの記載の工夫にも限界がある。

- シラバスを参考にして履修する授業科目を決めるようにオリエンテーションや人間科学の基礎など演習科目等で指導しているが、聞き流してしまう学生もいるのだろう。困惑してしまう。

(2) について

- 授業外学修時間は、1科目について4時間ということになっているが、現実的には難しいと考えられる。現に昨年度春学期には学生から課題がきつすぎるとクレームがあり、秋学期はゆるやかにされた。いずれにしてもなぜそれだけの授業外学修が必要であるのかを学生に納得してもらった上で課題を出す必要があるであろう。
- 学生がどのようなツールを使い学修を進めるかということも授業外学修の時間に影響を与えている可能性も考えられる。
- 科目ごとに授業外学修に何が必要であるかを考える。

(3) について

- 教員のスキルにばらつきが大きく、例えばハイフレックス授業に慣れていない教員もいて、学生たちも当惑している。教務委員会と教育研究推進センターで協力して対応や支援を進めていく必要もあろう。
- アンケート(課題)への回答に対して当初はひとつひとつフィードバックを行ってきたが、体力的にも限界があり、途中からはそれができなくなってしまった。よいアイデアがあれば教えていただきたい。

※上記のような意見、考えあるいは要望が出され、教員の努力だけでは対応できないことがあることも明確になったと考えられる。なお、人間科学部では本年度9月あるいは10月に、オンライン授業でさまざまな取り組みを行っている本学部教員を講師としてFD研修会を実施する予定である。

文学部

2020年度秋学期授業改善のためのアンケート結果を利用したFD活動

① 2020年度教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

宮武文学部長の挨拶の後、まず、教育研究推進センター野村教育推進部門主任(司会)より「2020年度秋学期授業改善のためのアンケート結果について」の説明があった。論点は多岐に亘ったが、多くの学生について、オンライン授業の学修方法や技術が向上したことが窺え、学生の満足度は昨年より向上しているとの報告がなされた。その後、豊口センター次長より今日のFD活動の趣旨が説明され、文学部構成員による質疑応答、意見交換に移った。主な意見は以下の通りである。

- オンライン授業に対する評価について、各学科で差異があるのか関心がある。例えば、図書館の使用が制限されているため、学生は専門の書籍が入手できず、課題を出す時もジレンマがあるが、他学科はそのような困難を抱えていないであろうか。
- オンライン授業や対面授業のコンテンツをもっと考える必要があるが、教員はオンライン授業のノウハウを片手間では習得しづらく、何らかのサポートが必要。今後はオンライン授業や対面授業の両方のメリット、デメリットを考えていく必要がある。
- 学生たちにとって、もっと操作しやすい授業アンケート機能があれば回答率が上がると思われる。例えば、QRコードを作れば携帯でもっと簡単に回答できる。
- また、授業アンケートは一定期間を設ける、授業中の時間を利用するなどの方法も考えれば、回答率は上がると思われる。
- 多くの一年生は先輩などを頼りにできなかったの、様々な問題を自分で解決しようと努力していた。辛かったであろうが、それにより多くの学生が自立したのではないであろうか。
- リアルタイム型、オンライン型の授業があるが、どちらも双方向の授業を心掛けている。やはり、対面授業は大切なことであるが、未だに学生の顔が見られないので不安である。
- 学生が参照しているシラバスはどれなのか。Bibbs

のもの、manabaのものによって、アンケートの回答が変わってくる可能性がある。(→公式にはBibbsのものであるが、履修学生はmanabaのより詳細かつ具体的なシラバスも参照していると思われる。)

- アンケート結果からすると、学部生も大学院生も基本的には満足していると考えられるが、教員と学生の距離の近さからそのように答えている可能性もあり、その辺を掬い取る努力が必要か。また、オンラインやmanabaを用いた授業は学部ゼミの指導に適していると思われる。
- このオンライン授業の形態がいつまで続くのか、一時の代替プログラムに過ぎないのか、今年度、作成したオンライン用の授業教材は2、3年後も使えるのか。何年後まで使用可能なかアナウンスがあった方がよい。(教務委員の回答→オンラインのままになる授業の割合は教務委員会資料に書かれているので、ご参考にされたい。)
- オムニバス科目について、大人数授業はオンライン授業が適していると思われる。外国語科目はオンライン授業と対面授業の両方で対応している。学生は最初、戸惑っていたが、教員よりも学生の方が順応性が高いと思われた。
- Assessment Policyの観点からも授業改善のためのアンケートを考える必要がある。「授業(に対する)アンケート」として、授業改善に役立てることも考えられる。

② 次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

上記で出されたご意見はいずれも有益なご意見であったと思われる。

このようなアンケートについて、従来より、母数が少ないから意味がないのではないかと、また、コロナ禍でのアンケート実施では真面目な学生しか回答しない、逆に授業に不満がある学生ばかりが回答している可能性があり、データとしての信頼性に欠けるのではないかなどの意見が散見されてきたが、学生の回答はいずれにしても貴重な意見である。とも

すると、コロナ禍におけるオンライン授業の側面ばかりが強調されるが、教員間で上記の課題を共有し、アフターコロナの世界においてもオンラインの学びの可能性の追求と実現を考える時期に来ていると思われる。しかし、同時に多くの教員が言及していたように、対面授業の重要性が失われることがないことも言うを俟たない。

学生も教員もコロナ禍の世界で、対面授業とオン

ライン授業（リアルタイム型授業、オンデマンド型授業）が混在し、多くの困難の中、手探りの授業運営が続いているが、今回のアンケート結果なども参考にし、よりよい授業運営を一步ずつでも進めていくことが求められる。また、二次的な課題として、非常勤講師の先生方も含め、教職員で様々な課題をどう共有し、バックアップして、協力していけるのかなどの問題も考えるべきである。

情報学部

2020年度秋学期授業改善のためのアンケート結果を利用したFD活動

情報学部では、2020年度秋セメの「オンライン授業についてのアンケート」の集計結果を、各学科において回覧した。それらをふまえ学科会議等で意見交換・議論したうえで、FD活動当日は、各学科長からその結果報告を求め、併せて参加者と意見交換を行った。以下では、内容の詳細を記すが、以下の①②の項目は不可分であるため、まとめて示しておくたい。

- ① 2020年度教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果
- ② 次期に向けた課題
(授業方法の改善、教育課程の改善など)

情報学部の学生は、他学部全体と比較して、「授業時間以外の学修時間」が、やや長い傾向にあった。また、「学修に意欲的に取り組んだか」どうかを尋ねた設問からは、より意欲的な学びを進めていた姿が浮かび上がる。一方、学修行動に目を向けると、「パソコン・スマートフォンで調べ学修をした」という項目以外は、他の学部と比べて活発に行われたとはいえないようである。対面授業よりもオンライン授業がまだまだ多い傾向にあり、施設を利用した学修や友人との協力による学修などの学修行動が減少することは、時期的な背景もあろうが、その他の行動も含めて、やや偏りがみられる。また、学修成果についての設問の結果からは、「知識・スキル」の項目のみが多くなっている傾向にある。

このようにデータから、情報学部の学生は、しっ

かり学修時間を確保し、意欲的に、また、専門を生かしたITを活用した学修行動で学びに取り組んでいたと思われるが、この背景には、プログラミングなど実践的な課題が多い授業が多いことや、専門分野の特性上、オンライン授業に比較的向いている授業や「知識・スキル」に重きを置いた授業が多かったといった背景も考えられる。また、昨年度から続くオンデマンド授業への「慣れ」も見られていたといえる。

今後は、学修意欲や満足度などを高める要因をさらに分析することで、授業改善に役立つのではないか。

議論では、昨年度のデータをふまえて、2021年度現在の学修行動についての意見も出された。オンライン授業ならではの教授法として配布・提示資料の質が向上したことや課題対応がより容易になったこと、対面授業が大幅に増加した現在において学修意欲がますます高まっていることなどが指摘された。また、シラバスをよく読まずにオンライン授業によるスキル積み上げ式の演習科目を履修した結果、課題についていけなくなった学生の事例や、オンライン授業の履修態度が悪い学生がいることなど、具体的な授業実施に伴う課題があることが話題となった。

アンケート自体が持ち合わせる課題についても指摘があった。学部単位で集計されているため学科の特性が分かりづらいことや、データの集計・整理上の課題について、調査自体の妥当性を客観的に評価してもらう体制の整備作りを希望する声などもあった。

国際学部

2020年度秋学期授業改善のためのアンケート結果を利用したFD活動

① 2020年度教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

最初に教育研究推進センター主任より、アンケート結果について、特に、全体回答との比較において国際学部の回答が特に特徴的である部分について、考察を交えた説明が行われた。その後、教員間で意見交換を行った。

オンライン開催かつ時間も限られていたため、全体を通して必ずしも活発な意見交換とはならなかったものの、オンライン授業1年目という特殊な状況下での学生の履修・学修状況について教員間で共有することができ、有益な機会となった。

〈主な意見〉

- 例年のアンケートにある自由記述欄はないのか。この部分が授業の実態が最もよくわかる部分である。
- 学生からは「オンライン授業の課題が多く負担となっている」との声があったが(特に昨年度中)、この部分を把握する質問も必要ではないか。
- Q9(オンライン授業開始以降の授業一回あたりの授業外学修時間)に関して、オンライン授業の場合の授業外学修の定義を学生も教員も理解していないのではないか。

- 個々の授業の把握の必要性から、これまでのように個別の授業ごとのアンケートを取ってほしい。

② 次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

特にQ15(オンライン授業全般について改善が必要な点)の回答結果をどのように評価するかということになるが、まだまだオンライン授業に対する学生の評価は厳しいものと言わざるを得ない。システムや通信環境といったハード・ソフト面を除くと、教員に関連する項目の平均値は軒並み2点台であり、これらの部分をどのように改善していくかが今後の大きな課題である。

また、個々の教員のオンライン授業への対応や取り組み姿勢にも差があるように感じられ、対面授業時と比較して教員間での授業の質にばらつきが生じてしまっており、それが今回の回答結果に反映されているのではないかと推察される。

したがって、個々の評価項目を改善するには、オンライン化に十分に対応できていない、あるいはオンライン化を活かし切れていない授業の質の底上げが必要であり、例えば、ベストプラクティスを共有することなどが有効な手段となるのではないだろうか。

健康栄養学部

2020年度秋学期授業改善のためのアンケート結果を利用したFD活動

① 2020年度教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

アンケートの内容(設問・取り方など)に関する意見が多く出た。

総じて、このアンケートの数字から意味のある分析をするのは難しい、という事。

母数が少なすぎる

学部の実情に合わない設問が多い

属性が不明(学年、GPA、性別など)

Q9

- manabaの小テストを授業外で行えば、問題解答時間の前後は必ず学修するので時間外学修を促す効果がある(提案・情報提供)。
- 一人一人の科目数が違うので個人の授業改善には役立たない質問である
- オンデマンドで授業外は定義できない。
- 単位取得のために定められた授業外の学修時間は2単位科目であれば授業1回あたり4時間である。設問の「2時間(以上)」では対応できていないのではないか？

- 履修の手引き(文科省令)との矛盾が生じる可能性
教務委員会との連携はとれているのか?
すべて法律通りに時間外学修を行うと取得上限の
単位取得には無理があり、上限の単位数を下げる
大学がでてきている。
- 健康栄養学部では厚労省からの指導(科目の種類
と単位数)があるので現実的には上限を下げられ
ない。

Q11

- 授業内で行ったZoomでのグループワークを入れて
しまった学生がいるのではないかな?
- 授業スタイル(座学・実習・実験・規模)によって変
わる。
- 回答数が少ないので確かなことは言えないが、オン
ラインになったことで予習・復習の取り組みが
増えたのではないかな?

- オンラインスキルが教員も学生も不足しているの
ではないかな?
- オンラインスキルを上げるために時間を使うこと
は本末転倒では?

② 次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

専用シートに記入した個々の授業改善案について
は、オンライン、リアルタイムなど授業形態に関わ
らず、多くの教員がmanabaの積極的な利用による
授業改善を考えていることが伺えた(15名中12名)。
特にドリル機能や小テスト機能を用いることで事
前・事後の学修を促すことに期待が大きい。

manaba利用以外では反転授業の取り組みを検討
することや、図書館利用の推進などが複数の教員の
意見としてみられた。

経営学部

2020年度秋学期授業改善のためのアンケート結果を利用したFD活動

① 2020年度教育活動の振り返り、アンケートの結果 に関する考察、意見交換の結果

授業のオンライン化による影響は多少見られる
が、大きな問題点はなかったと考えられる。

履修を継続しなかったことについて回答学生の約
6割がオンライン化の影響があったと答えているが、
履修科目全般について学修に意欲的に取り組んだと
答えた学生が8割強、平均値4.25となっていて、オン
ライン授業の満足度について約6割の学生が満足、
平均値3.51となっている。

もちろん、対面授業時(2019秋)の満足度(満足8
割強、平均値4.23)と比べたらオンライン授業の満
足度は少し落ちているが、「予習・復習や関連する活
動に取り組んだ」、「教科書以外の関連書籍や論文等
を読んで学修した」、「パソコンやスマートフォン等
のICTを利用して調べ学修をした」、「友人とオンラ
イン等で協力しながら学修した」等の項目を主体的
に行っていてかなり改善された傾向を示していたの

で、オンライン授業のよさもあったと考えられる。

② 次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

大学全学部と概ね同じ傾向を示しているが、オン
ライン授業に対して「大学及び担当教員からの情報
提供」、「担当教員のオンライン授業のスキル」、「学生
と教員との双方向のコミュニケーション」について
改善を求めているので(平均値2.33~2.59)、早急に
改善努力することが課題として考えられる。

学部としては、担任制度とゼミ指導教授を積極的
に活用するとともに教員間の情報交換を通じて学生
達がしっかり学修できるよう引き続き努力する。そ
して、「意欲的に取り組んだ学生」の割合が対面授業
時より高かったこと(平均値4.02:4.25)に基づいて
教員間のオンライン授業のスキルやノウハウの共有
についても努力する考えである。

学部におけるFD活動

第1回文学部FD研修会「PROGテスト実施報告と分析」

文学部 野村 忠央

文学部では5月19日（水）18:00～19:10に2021年度第1回文学部FD研修会を実施した。司会は宮武利江文学部長、出席者は文学部構成員37名、内容としては株式会社リアセックのPROGテスト担当者酒井陽年氏を講師としてお招きし、本年1月に文学部学生を対象に実施したPROGテストの解説と文学部の結果分析について説明をしていただいた。

具体的内容としては、コンピテンシーやリテラシーの用語の解説、テストのそれぞれの項目についての他大学学生と本学学生の比較、日文科、英文科、

中文科、外国語学科のそれぞれ学生の特徴や秀でている点、弱い点などが解説された。

教員側としては、この結果を担当学生の面談等で活用すること、あるいは学部学科の指導方針決定やカリキュラム改訂等で活用することなどが考えられる。また、受験した各学科の学生には、テスト結果を参照して、自分の強みや弱点などを把握し、今後の就職活動や卒業後に向かえる社会人としての基礎力養成に繋げていくことが望まれる。説明後の質疑応答も複数の質問が出て、活発な研修会であった。

「私の工夫」を共有する試み～人間科学部教授会にて～

人間科学部 青山 鉄兵

人間科学部では、9月の定例教授会の開始前にFD研修会を行い、青山から「オンライン授業、私の工夫」と題して報告をさせていただきました。

当日は、オンラインでのリアルタイム講義や、オンデマンドの動画作成において、双方向性を高めるために実施してきた工夫を中心に、実際の動画コンテンツ等を先生方に観ていただきながら紹介しました。具体的には、①授業内での聞き手の配置、②匿名でのリアルタイムのコメントの表示、③昨年度の作成動画の反転授業への活用方法、などについてお話ししたのですが、先生方にも受講生の気分を体験していただくため、実際の授業と同様、別の先生に

聞き手役に入っただき、先生方から匿名でのリアルタイムコメントをいただきながら進めました。当初のご期待にどこまでそえたかは心許ないところではありますが、興味を持ていただいた先生や、私の紹介した方法をご自分の授業で試して下さった先生もいて、嬉しく思っています。

こうした授業実践の共有は、コロナ禍でこれまで以上にニーズが高まった面があると思いますが、LMSの使用の普及と同様、コロナ禍がもたらしたある種のレガシーとして、今後も積極的に取り組んでいけるとよいと思っています。